

# 履正社 柔整

— 過度な薬漬け検査漬け医療を検証する。本当に国民が必要な医療の選別が見えてきた —

副校長 田中 雅博

令和 3 年、2021 年が始まりました。今年もご愛読のほどをよろしくお祈りします。



日本に感染症が出現して約 1 年経過します。現時点で抑え込む手段は、人の活動を制限することしかありません。1/7 (執筆は 1/8) に関東 1 都 3 県に再度緊急事態宣言が発出され、政府より具体的な形で要請が明らかになりました。ただ、昨年の第 1 回目の宣言と異なる部分も多々あり、生活維持に必要な活動はもちろん、感染予防を徹底した上で、学校や教育に関しては休校や制限はありません。昨年は機会あるたびに、卒業生や実習先の接骨院、クリニックなどから訪問やヒアリングを行い、売上の変化や推移を尋ねた所、今となれば、得体のしれないこの感染症の影響で、昨年の4 月 5 月は患者も激減し売上も落ち込みました。マスクや消毒の衛生品や空気換気などの感染症防止予防に関する産業は別にして、医療だけではなく、ほとんどの産業に大打撃を与え、輸送、観光、飲食といったエンターテインメント産業は壊滅状況でした。

夏を超え秋になって接骨院や整形外科クリニック、デイサービスは、拡大前の水準に戻っていました。統計的数値は確認していませんが、第 1 次医療であるその他の領域、例えば一般内科、耳鼻咽喉科、歯科、小児科、調剤薬局などは患者数が回復しておらず、厳しい経営を強いられていると聞きます。患者は拡大前に受けていた検査や薬の必要性を判断し、通院を控えているのだろうと推測されます。

健診(健康状態検査)の受診控えがどのように影響するのかは長期の検証が必要ですが、医療者側から、言うがままに受けていた、検査と注射、投薬などについては、結果として受けても受けなくてもよかったのではないかという気づきが生まれたのではないのでしょうか。接骨医療を始め、手で治療を行う手段は、必要な医療提供として選別されていることは間違いありません。

医療提供種別は、第 1 次医療から第 3 次医療まであります。重症化した感染症患者を担当する医療や、第 3 次医療、救急救命医療は別格で考えるべきではありますが、受診者数が最も多い、身近な接骨院やクリニック、デイサービスなども含めた第 1 次領域で、必要なのか、そうでないのか、今回の感染症の影響で判明してきた結果ではないのかと考えます。医療費削減策としての高齢者 3 割負担の議論も出ています。この結果をもとに、次の世代につけを回さない、政府は社会保障費や医療費削減にむけての強い施策も提示してほしいと思います。

## <辻井副学科長から冬号のメッセージ>

3 年生の就職希望調査を分析してみると、年々機能訓練指導員としての就職を希望する者が増加しています。1 年次の第 I 期臨床実習(基礎見学実習)で介護保険施設である通所介護施設が併設されている接骨院で実習を受けることも影響し、3 年生での新カリキュラム『社会保障と柔道整復師の職業倫理』で医療費の現状や高齢者医療の実態も教授しており、医療介護サービスの対象者がほとんど高齢者となる時代背景の実態も考慮しての結果だと思います。進路就職指導は例年、学科長田中先生が担当され、学生との就職面談(ヒアリング)の中で、いつも話をされている内容はまさしく、生活給確保とやりがい活動の両立を示しているワードです。その内容は以下です。『今後、生活給は高齢者などを対象に考えていかなければならない。スポーツ医療の専門職としては得意技で実践すべきだ』と。ただ、機能訓練指導員としての就職を決める学生には、管理柔道整復師資格取得の新制度にも適用できる接骨院併設型のデイサービスでの就労を推奨しています。時代や制度の変化に常に適合できる環境を選択する事が重要なのです。今年の履正社法人年初式で前田副学園長が以下のお話をされておりました。『ダーウィンの進化論、生き延びるのは、環境の変化に適応できる者だ』と。

## <タナカジャーナル>

### 『 オンライン診療で患者利益に、これからの接骨医療 』

病院や診療所がない無医地区や公共交通機関では通院できない離島や過疎地域では、試行的にオンライン診療が実施されてきた。処方箋もオンラインで行い、調剤後の薬も配送でまかなう。急激な変化の可能性が少ない生活習慣病については、オンライン診療でカバーできることが分かってきた。

対面診療には、時間と手間がかかり、継続診療を受ける機会が減少することもある。その結果、時には重症例に進展するなど、リスクを背負うことも多々ある。まずは生活習慣病や慢性的な症状固定の受診もオンライン診療の導入を早急に検討すべきであろう。柔道整復師の対象疾患である、骨折脱臼は応急処置を除き、医師の同意が必要である。現時点では、医師が患者を対面診療しないと同意を得ることはできない。

もし、オンライン診療での同意が可能となると、骨折や脱臼と客観的に判断できるデータが必要になる。ここは、応急処置を行う前に超音波エコー観察器による画像と、携帯カメラで外部の所見を記録しておけば、次の来院までに同意が得られ、そのまま継続して施術が可能となる。



またオンライン同意が可能となると、所在地などを選ぶ必要がないので、柔道整復師の施術に理解のある医師を選ぶこともでき、医師からの詳しい情報や治療方法を受けることもできる。抵抗勢力によってこれまで閉ざされてきたオンライン診療が、今般の感染症拡大でクローズアップされ、簡単に安価で受診できる接骨医療が普及する可能性も大きい。すべては、患者利益に貢献できる事、声を大にして言いたい。

## <履正林>



**1. 柔道整復教育評価機構：** 高等教育においては、第3者の外部委員や組織が教育機関の質保証の評価を行うことが望ましいとされている。大学では7年に1度の外部評価の実施が義務付けられているが、専門学校においては、監督行政の定期監査はこれまで実施されてきたが、制度として外部評価機関はなかった。仮称ではあるが、日整、財団、接骨医学会と主管する学校協会が表記の機構を立ち上げ、第3者評価を実施することになりそうだ。すでに事務所も役員も決定している。当然文科省委託事業として、審査の義務化を目標としている。この制度変更の動きに教務のM先生は『10年ほど前に黒い鞆を持って目つきのこわい監督官庁の人が2、3人、2日間に渡り来校しましたね、今回は柔整専門の評価機構だから、身内の審査でしょう。こわくないですよ、大丈夫、大丈夫』これから迫ってくる事態が理解できていない、大器晩成型のM先生らしい感想だが、その声にデスクの前で頭を抱えている Tsu 先生がいた。

**2. 実習フィールドスタディー：** 感染症の影響で、今年度の1年第2期、2年第4期の臨床実習は演習形式での履修となった。履正社柔整では、臨床実習担当教員と臨床実習指導者(バイザー)を含め、研究テーマをもとに学内プレゼン(予備プレゼン)と現場プレゼンに分けて演習を行い、バイザーとともに発表資料やプレゼンでの評価を行い実習単位として認定する。実習担当の女性のM先生は『臨床実習に代わる単位を認定するので、2学年ともそれ相応の研究活動と発表資料作成、そしてプレゼンテーションをしてもらわなければ、単位を認定することはできません。手抜きの学生が多いですから』と、いつもより厳しい指導体制を準備していた。剣道参段の女性剣士らしい覚悟を感じたのは私だけではない。

**3. 履正社創立100周年：** 今年の法人年初式で、釜谷理事長からも話があったが、来年履正社は創立100年を迎える。釜谷等理事長の祖父、釜谷善藏先生が1922年に創始してから100年。小生はまだ20年ほどしか知らないが、釜谷等理事長から、幼少の頃、善藏先生に可愛がられていた話を何度か聞いた。微力ながら心して準備にあたりたい。現時点では、記念事業の日時、場所、内容などは未定が、教務のF先生は『やるなら大阪一のホテルで、にぎやかに盛大に、履正社卒業で活躍している、例えばヤクルト山田哲人君など招待しましょう。お客さんもたくさん呼びましょうよ』いつもお祭り騒ぎが好きなF先生だが、100周年事業への膨大な時間とお金、準備や手配、手間がわかっていない。その声に、再度デスクの二つ隣で頭を抱えている Tsu 先生がいた。

**4. 非接触型体温計：** 感染症拡大の影響で、急速に普及した赤外線を利用した非接触型の体温計。イベント会場やデパート入り口でおでこや手首で検温する。昨年 6 月に登校が再開されてからは、玄関で全学生対象に検温を実施していた。短時間、安易で体に接触しないので日常的頻繁的に検温が可能であり、学生は自己の日々の体温変化や日内変動など、変動の因子や個体差による差異、高血圧、低血圧、脈拍数の多少にも影響していることを直に把握しており、バイタルチェックの意識や理解に貢献している側面もある。救急病院での勤務経験もある N 先生は『平素からのバイタルチェックの意識は重要です。体温、脈拍、血圧、呼吸の 4 要素をしっかりと確認し、患者の変化を常に感じ取ることが医療従事者としての責務なのです』と、病院での骨折や外傷処置の救急対応を経験してきた N 先生の目はいつもと違っていた。

**5. 2024 年新校舎移転に向かって：** 一昨年から昨年にかけて、十三駅周辺の再開発の情報は、メディアでも報道があったし、大阪市の HP でも掲載されているとおり、2024 年 4 月の完成に向けて動きだしている。大阪市の HPにはまだ十三にある医療とスポーツの学校としか掲載されていないが、これはまさしくわが校だ。詳細は、大阪市の HP をご覧いただきたいが、学内では 2024 年 4 月移転の情報は共有されている。阪急京都線は、梅田に向かい十三駅をでてものの 10 秒ほど、進行方向向かって左側に空き地が現れる。ここに新校舎が移転する計画だ。まだ更地の状態であるが、まもなく着工されると聞いている。どのようなデザインでまあらしい校舎になるのか、この情報は入手されていないが、わかり次第、季刊学科報だけでなく、月間 RJM でもお知らせしよう。履正社 100 年にふさわしい大構想のイベントがまもなくやっている。大きな期待をいただきたい。

## ☆教務室からはみ出し寸言☆

新聞や雑誌で目にとまった記事、誰かとの会話、まち角の看板、ネットの広告などから感動した、共感した、泣けた、じーんときた、などのワードやセンテンスを紹介します。

私事で恐縮ですが、私の子供たちが世話になった、城北メッツ少年野球の大塚監督の言葉から

### 「子どもは親の鏡、子どもの行動を見れば親がわかる」

大塚監督いわく、大人は人前では取り繕い、役者とである。しかし、小学生にはその能力はまだ身につけていない。子供が、努力するも、力を抜くも、行動はすべて親の鏡となって映し出される。

つまり、一つのことをやり抜く能力は、野球の成果だけに限らず、将来、勉強にも人間関係にも影響していくのです。努力する子、継続する子、伸びる子を見れば、この親にして、この子ありという事は多々あります。その逆もしかり。

社会の中で生き抜くには、相手を見抜く力は重要だけれど、その本性は見極めにくいことが多いと思う。子供の態度や行動を観察できれば、もしかしたら答えが見えるかも。



## 『随想、母校への思い』



学校法人行岡保健衛生学園

行岡整復専門学校 整復科 35期卒 田中 雅博

人は誰しも、教育を受け、成長する。目的はさまざまだが、社会貢献、環境貢献、他人貢献たる人物になり、世の中や社会や環境に利益となりえる人間に成長することが最終の目標だろう。私も幼稚園から小学中学高校、大学、大学院、そして職能教育である接骨学校を卒業した。それぞれの教育を受け、異なる思いはある。しかし、現在の職業に直結している教育は何といても職能教育を受けた接骨学校だろう。母親も、明治生まれの母方の祖父(すでに他界)も柔道整復師、母親(以下、純子先生)は私と同じ行岡整復専門学校の卒業生だ。

今回、学科報編集長の竹内先生から特別に執筆の依頼をいただき、特別企画として、『随想、母校への思い』を以下に紹介する。

私の接骨学校は、昭和7年に設立された、日本で最初の接骨学校、行岡整復専門学校(現在は、大阪行岡医療専門学校長柄校整復科と改名、以下行岡)である。私は35期、純子先生は9期生だ。教務の辻井先生(44期)も、福田先生(39期)も、講師の中谷先生(45期)も、齋藤先生(42期)も、同じ行岡の卒業生だ。行岡は3年前に入学生の募集を停止し、この3月末で88年の幕を閉じる。(他学科もあり、学校は存続)

私が行岡へ入学した頃、純子先生が先輩として、よく学生時代の話聞かせてくれた。当時、学校が行岡外科病院と真隣に併設されており、ストレッチャーで救急患者が搬送されていた話、講師の先生が緊急手術で授業を抜けて走り出す話、手術や処置見学の實習でしょっちゅう病院に出入りをしていた話、などなど、昭和時代のリアルな接骨医療をたたきこまれた。今思うとそれはそれですごい時代、うらやましい医療教育環境の学校だったと思う。

行岡の話は親子間にとどまらない。上記に記載した、行岡先輩後輩のメンバーで、履正社柔整教務室でよく懐かし話をするところがある。実は、もう20年前になるが、辻井先生、中谷先生、齋藤先生は小生と同じ行岡の教務で教鞭をとっていた仲間だ。あの頃の話をする、今日につながっている事が多々ある。さらに履正社柔整の實習施設の指導者にも行岡の先輩後輩がたくさんいらっしゃる。

昭和7年創立、行岡整復専門学校始まって以来、一泊研修旅行を実施した事、研修先で学生間のトラブルが発生して、解決に手こずったこと。講師として同窓会八木義雄会長(昨年他界)と畠中宰治副会長も同行され、朝まで酒を酌み交わし、柔整の何ぞやをお聞かせいただいたこと。数多くの懐かしい話を思い出す。実は今までも和歌山へ出向いた時には、畠中副会長(双子の兄、畠中耕治先生にも)を訪れることにしている。

行岡で教育を受けたこと、先輩として、純子先生、八木先生、畠中先生から教えをいただいた事、そして行岡で出会い、つながっている多くの後輩とともに仕事ができている事、感謝に堪えない。

この3月末で有形物として、母校はなくなるが、行岡で教育を受けた柔道整復師として、履正社柔整の学生にも、いい所はしっかりと受け継いでもらいたい。

『母校への思いは永遠に消えない。』

